

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第41巻第2号 二〇〇五年十月

《翻 訳》

アルフレート・デーブリン著・岸本雅之訳

『ポーランド旅行』 「ルブリン」

そのような建物に人々が住んでいる。それなのにアーチ門の美を語ろうとするなんて

列車の中では誰かがいびきをかいている。グウグウではなく、グォーグォー、カツカツカツカツと発しては飲み込んでいる。弁がふさがっているのだ。またかき始める。室内灯の下でこっくり居眠りをしている人々の顔。ときおり座席の上で跳ねるようには姿勢を直している。がっしりした体格の男性が二人いる。一人は褐色の口髭をたくわえ、ポーランド風のふつくらした顔立ちだが、寝顔はぼつりして、口元はすっかりだらけ、唇が重そうにたれていて、うつけたように眠っている。眠っているというより、眠らされている。睡魔にとらえられ、はじめのうちは腹を立てたものの、今は眠らされている。そして不機嫌にはあれ、おとなしく義務を果たし、睡魔の強制に甘んじている。もう一人は、灰白色のあご髭と垂れ下がった口髭を蓄えた頭部を席の背もたれに投げかけている。もたれかかるように座って眠っている様は視霊者のようだ。何かを観察し見入っているのだ。息をこらして眼前に展開する像を追って、目を離さない。頭はぴくりともしない。

私は彼らの間を歩き回る目覚めた猛獣さながらだ。私は再びワルシヤワに近づいている。もう朝だ。一帯は沼沢地で、ところどころ草が生えて島になっている。平坦な草原に霧が立ち上り、森はずれでは突然に蒸気が湧き立ち、平原にたなびいている。行く人々は腰まで霧に隠れて、上半身しか見えない。木立が浮いているよう見える。村が近づくにつれ霧は消えてゆく。茶緑色の草原が広がっている。ワルシヤワが近づいてくる。そして、過ぎてゆく。ルブリンへ行くのだ。南方へ行かなければならない。ルブリンは美しい都市だそうだ。

こうして私は日がな一日車室のなかで凍えて過ごす。脚が痺れて痛い。夕暮れの暗がりのなか、私は飛び上がる。煌々と輝くルブリンの小さな駅舎。嬉しさがこみあげてくる。

そうして辻馬車にのって市中へ向かっていると、この数ヶ月来はじめて、雲ひとつない広大な夜空が現われる。それは漆黒の中に巨大な星座を宿し、無限に広がっている。危ない、危ない。頭上に広がる星のきらきらまたたく

天穹は、底知れない深い海のような。飛び上がって銀河に沈んだり、天に落下しないようにしなければ。それともにも、言い知れず誇らかな気持ちに満たされて、私は馬車の中で身を伸ばして何度も天を仰ぐ。定かには判らないが、この満天の空が何かの兆候であるかのような気がして。

長いこと街灯のない道を走ると、突然明るくなる。街路は大変な人出で、笑ったり雑談に興じる賑やかな声が聞こえてくる。こうしたお喋りや笑い声はルブリン滞在中しよっちゅう耳にすることになるものだ。それは集団で散歩する人々や男性たちのものだ。ヴィルノではそのような集団は見かけなかった。奇妙なことだ。砂地や寂寥の草原、湿地をはるばるやっていると、都市を隔てて、突然笑い声があがる。明るい街灯をあびて再び人々が行き交い、ボンボンやケーキの店が開いている。私は何とも言えず幸せな気持ちになる。有り難さがこみ上げてきて、手を合わせる。

夜はホテルで五時まで暖かく眠り、夢をみた。多くの像が現れたが、それらをしかと捉えることはできなかった。私はなお数時間まどろんで、夢見心地を楽しんだ。

メインストリートはワルシャワと同じで「クラクフ郊外通り」といい、並木がととのえられ、三、四階建ての小さな建物やほどよい大きさの商店が立っている。横町は短く、すぐに途切れてしまう。向こうの方に黒いオペリスクが立っている。金色の野暮ったい二人の女性が手をさしのべあっている。石柱には一五六九―一八二五という数字が刻まれている。この地でポーランドとリトアニアの統合が成立したのだ。石柱の向こう側では巨大な建物が取り壊されている。つるはしを持った男たちがその上に立っている。惨めな残骸の山だ。これはロシアのギリシャ帰一教会の大聖堂だったが、ワルシャワと同じように打ち壊されているのだ。痛ましい。私は不意に心がふさぎ、侘しくなる。ワルシャワでは賛同できた。それは首都だったのだから。しかしなぜこのように組織的に教会を破壊す

る必要があるのか。そのまま放っておくべきだ。教会になんてことをするのだろうか。無知、憎悪、愚行。嫌悪感で身震いするほどだ。

老いた将校が車道を渡ってくる。古いロシア外套を着ている。背の高い小羊の帽子をかぶった農夫たちが行く。婦人方は明るい色の長靴下をはいている。玄関先では乞食たちがおじぎをしている。建物の中をのぞいてみると、中庭は奥行きがあり、ベランダ付きの木造の後屋が連なっている。ベランダには木箱が並べられていたり、洗濯物でおおわれている。倒壊寸前の建物がある。その下には瓦礫が散らばっており、角材で支えられている。市庁舎はまぶしい白色に塗られている。暇なポーランド人労働者たちがその円柱のあるポーチに座って、足をぶらぶらさせている。古い塔のある門を眺める。そこには豊かな色彩の聖人画がかかっている。

身なりの良い市民、ポーランド人労働者、農民、民族特有の服を着たユダヤ人。それにしても人が少ない。中都市というよりも小都市だ。ただドイツの小都市のように眠たげではなく、貧困が歴然と表れていて、貧困に追いかけられ追い回されている。人々は食べるために働かなければならない。そうして偉大な過去は人々の暮らしの中で崩壊しつつある。いはば、晴天の下で、大洪水に見舞われているのだ。通りを引き返して、昨夜人々が笑いながら散歩していた小さなホテルが立ち並ぶあたりを行くと、寒々とした表情で人々が仕事に向かっていて。これらの男性たちの額は高く秀で、後方へ後退している。彼らはブロンドや茶色のもじゃもじゃ髪をしたロシア風のタイプだ。淡いブロンド髪の子供たちがあちこちを急ぎ足でゆく。がっしりした体格の男性たちに出会う。彼らの骨太で肉付きのいい顔は角ばっている。濃い口髭は垂れているが、なかには先端をひねった髭も見られる。

ここでもう建物がまばらになる。ライラックの小さな花びらが道路に舞い散っている。花吹雪のようだ。もうほとんど郊外だ。古い立派な公園が現れ、続いて兵舎がある。新兵が窓のところであくびをしている。農夫の小さな

荷車がギイギイ音をさせて町へ入ってくる。横道を入ると人気のない運動場があり、カトリックの墓地がある。さらに広大な建物が続く。^(三)カトリック大学だ。これでポーランドのルブリンの大部分をまわったことになる。けれどもすべてが沈黙したままでも私に語りかけてはくれない。案内なしで歩いているから。

天井の低い店内。テーブルには白いクロスがかかっている。そのテーブルの一つに丈のある鉢植えの花が置かれていた。あるレストランでのこと。客が来るとボーイがその鉢を隣のテーブルに移している。その席に誰かが座ると、そのまた隣のテーブルに移している。しまいには外へ出さなければならぬ。私の後ろの壁際にはたくましい市の名士たちが陣取っている。私には彼らの姿は見えないのだが、彼らがピチャピチャと舌鼓を打つ音が聞こえるのだ。小柄で太った老人がやってくる。左足が不自由だ。私の後ろのテーブルに向って深々とお辞儀している。長靴を履いた若者がぶらぶらと入ってくる。すでに入り口近くのテーブルからパンを取っていて、それをかじりながら気どってやってくる。それから私の向かいに座り、口髭をひねり上げてから、器用に口の中のものを捜し始めるのだが、見つからない。右に左に奥歯をさぐっては指を眺めている。お仕舞にテーブルクロスで指を拭いている。女性が二人、スープをすくっている。一人は青い帽子をかぶっている。白い帽子のギムナジウムの女生徒の一人が窓越しに熱心に中をのぞいている。将校が二人テーブルの間に行く。真っ直ぐ背筋を伸ばして、小ざっぱりした制服を着た姿を見るのは、気持ちが良い。彼らは勲章をつけて座り、静かにボーイがくるのを待っている。

ルブリンの私の宿はブイスクチュシツア通りに面している。聞くところではいいホテルだそうだ。当市は既に十世紀にその基礎が築かれている。私のホテルがその証人だ。夜、ホテルに入るとフロント係がいるのだが、後ろの小

部屋で帽子を目深にかぶり石棺のような格好で横になって、夢うつつの状態だ。何か合図はするのだが、ただ夢の中の像に答えているだけで、うつつのことではない。階段を上がる。階段の手すりは本物の大理石と言いたるところだが、暫定的に白塗りの木製だ。私の部屋は三階にある。壁には十世紀にしっくりが塗られ、油で固められた。その後、時の流れとともに壁はくすんでいった。さらに時を経て、ホテルは何度か戦場になった。ホテル内で多銃身砲が発砲され、いくつかの壁やドアに亀裂がはしり、ほこぼこになっている。ホテルの管理部は歴史から学び、その傷痕の保存に配慮している。またその時以来、ホテルでは戦時の習慣が受け継がれた。廊下では早朝から鬨の声にも似たわめき声があがり、驚くほど乱暴なやり取りがドア越しに交わされている。そして下の中庭には、晩の六時から朝の四時ごろまで作動して、機関車のようにシュツシュツ音を立てる装置が据えられている。ベッドに横になると、規則正しく音がして、すぐに戦時のような、あるいは寝台車に乗っているような気になる。無料で幻影を楽しめるというわけだ。

このホテルでもっとも驚くべきことの一つに、私の部屋のドアがある。廊下を通った時すでに、このドアの取っ手には何か特別な事情があることに気づいていた。現代では十世紀の手工業はもうあまり馴染みのあるものではなくなくなってしまった。メインストリートのクラクフ郊外通りにポーランド・リトアニア合同を記念するオペリスクが立っているが、もっと古い、考古学的ともいえる記念物がこのホテルのドアの取っ手なのだ。ちなみに、私は今そのホテルで書いているのだが、電灯のコードが机にとどかないので、ベッドに座って書いている。(ヤゲエボオ朝時代には、ジグムント・アウグスト王の時代になっても、まだここで書きものはしていなかったのだ。)ホテルのドアは一見すると、虫食いのある化石のようなもので見栄えはしないが、それでも普通のドアと変わらないように見える。扱ってみて、というか、扱おうと試みて初めて、それがただものではないことに気づくのだ。ここ

のものはある種の特性を持っている。平凡な性質は時の経過とともに消えてしまうものだが、そのほかに年輪を重ねながら非常に際立つてくる性質もあるのだ。

部屋へ入る時は、最初に部屋へは行かない。というのも私は鍵を持っていないのだ。鍵はこの階の建物を半分まわったところの部屋なじみの居場所を持っている。いずれにしてもフロント係のところにはない。ついとうっかりとフロントに預けても、鍵は馬か犬のように頑固に本能的にそこへ帰ってゆくのだ。それで鍵を手にとると、鍵は二つある。鍵はいつも鉄の輪に二つ付いていて、切り離すことができない双子の鍵だ。そのどちらが本物の私の鍵なのか、私は見極めることができない。ハンカチなら結び目をつくって印にできるが、そんなことを鉄にするわけにもゆかず、調べてみても、いつも物理学的に鍵が同じものだと再確認せざるを得ない。それに私が正しい鍵に付けたインクの線は裸足の世話係の少年が拭き取ってしまった。二度目の時に、私は少年にその線の意味を理解させようと試みた。彼はポーランド語を話し、私はドイツ語を話した。私は身振り手振りをまじえて話した。少年は興味深そうに私を眺め、もう一人の少年を呼んだ。この少年も私に関心を示した。彼ら二人は、私の長い熟慮の末の解決策であるこの線を吟味して、頭を振って笑った。その時、彼らは明らかに、鍵が汚れていると、私がその線について苦情を言っていると理解したのだ。というのも少年の一人が不意に鍵に唾を吐きかけ、それを袖で拭き取って、晴々とした顔で私に鍵を返したのだ。彼らは私の反応をうかがっていた。私が鉄の輪から正しい鍵を外そうとすると、二人はこれを制止して、長々と抗議の言葉を連ねてから、どうしようもなく分かちがたい代物をふたたび私の手に握らせた。私は引き下がった。私は非常に暗い、というか真つ暗な廊下に立っていた。双子の鍵を手にとり突っ立ち、今回はどうなることかと思案した。鍵とこのドアの気性についてはすでによく分かっていた。つまりドアの取っ手は垂れ下がったままだが、うまくゆけば、——腹立たしいことだが、裸足の少年はいつも成功していた

——ちゃんと動いたのだ。これに対して錠前のほうは強情そのもので、たいへん奥が深く、どっしりしたドア全体に広がっていた。私は鍵をドアの奥深くまで突き刺し、その心臓部を刺し貫いた。そして、内部に入った。まさにこれが間違いで、中に入ったまま出られなくなってしまった。ドアは攻め手が突きかかるに任せていたが、早くも動きが取れなくなった。ある深さのところでは止まらなければならなかったのだ。どのくらいの深さかということはいまに秘密だった。しかしながら、ひとつよく理解できなかったのは、もう一つの偽の鍵も何とか鍵穴に合ったことだ。この厄介な偽の鍵を、——これはどうやら別のドアの、ひよっとしたら私の部屋の戸棚のものかもしれない。——ここにはいつも鍵がついていなかったのだ。（これは今思いついたことだが、部屋付の少年がなぜ抵抗しなかった。そこにはいつも鍵がついていなかったのだ。）——この厄介な偽の鍵をしばらくの間、一五分から三〇分位、鍵穴の一定の深さのところまで回したが、どうにもならなかった。私は赦しを請い願ひ、少年に来てもらわなければならなかった。少年は謎めいた手順で呪文とともにドアを揺さぶって正常な状態に戻し、その後で分ちがたい二つの鍵の一つを手に取り、そつと開けた。ドアが開いた。私自身も何度か偶然に正しい鍵をつかんだ。そして特別に礼儀正しく鍵を回し、愛情をこめて注意深く錠前の中を探った。ここで手荒くするのは無意味なことだったのだから。錠前は動物のようにおとなしかった。私は何食わぬ顔で、真心をこめて、息を凝らして試みた。とうとう問題の深さを探り当て、鍵を回した。一回、二回、——時には（心臓が止まりそうだったが）三回、四回、五回。何回でも回せた。いつ止めたらいのか、私は決して突き止められないだろう。この時、いくつかの壁やドアの弾丸の跡が意味しているものに思っていた。それは、ドアから出ることができず、結果としてホテル内での往來を妨げた客を射殺しなければならなかったその射撃の傷跡だったのだ。私は恐る恐る作業した。そして成功した。ドアの悪意はそれほどでもなかった。長い歳月は人を穏やかに慈悲深くするものだ。ある回数逆に回せばよかったの

だ。

だが、ドアはこれでは開かなかつた。開錠してはいたのだけれど、開かなかつた。今度は取っ手の番だつた。

これはある種のゆるんだ状態でぶら下がっていた。それがまたドアの不気味な堅固さの保証にもなっていた。このドアを完璧に閉めることはできなかつた。すぐにまた開いてしまった。しかし錠がかかると、頑固で決然としていた。錠前を攻めた後、私は取っ手を説得し、軟化させ、何らかの働きかけによってかたくなな状態から引き出さなければならなかつた。これも根気に裏打ちされた愛情によって初めて可能なことだつた。やさしく押しついたり引いたり揺すつたり、いわば取っ手を安心して寝かせつけた後で、不意に力いっぱい衝撃を与えなければならなかつた。奇襲、不意打、抜き打ちが成果を挙げた。ドアはぱつと開き、洗面台にぶつかつた。そのためホテルの管理部門は、戦時に備えてのことでもあるが、洗面台にはグラスやガラス瓶は置かず、どっしりした洗面器を二つ置いてあるだけだつた。口をすすいだり歯を磨いたりするものが何もないと腹をたてるのは、何も知らない者だけだつた。彼らはこの建物の精神が分からなかつたのだ。

私はそのようなことには前々から慣れていたので、我慢できた。ドアとは魔術的神秘的な仕方では親しい間柄になつた。朝の外出時にドアが簡単に開いたら言うことはないのだが、拒んだ時には無理をしなかつた。我慢して、精進して、外へ出してくれるまで一時間おきに伺いを立てた。ドアは私の用向きに十分な理解と大いなる同情を示してくれた。

夕方、がらがらの大映画館《コロッセウム》に一人で入る。そこは千人を収容できるが、客は百人としない。床は氷のように冷えきっている。小編成のオーケストラが演奏を始める。もしヴァイオリンが歌い始め、君のところ

にやって来て、心をこめて直接語りかけたとしたら、君は抵抗できるだろうか。ヴァイオリンの甘い懇願と涙、宥めるようなチェロの呻き、これを言葉で表現するのは難しい。それらは真情にあふれ、聞く者の胸を打たずにおかない。映画のイメージは音楽でずいぶんと変わるものだ。オーケストラの頭上で、すばらしい映画が上映される。バルバラはとても美しい。恐ろしく寒いのだが、映画の一部を繰り返し返して見る。ロシアの修道院。修道女たちが深くお辞儀をしている。彼女たちの丈の高い頭巾は中世の上着の形に似ている。彼女たちは一心に十字を切っている。そこへ修道院の天井の装飾を依頼された画家がやって来て、修道女イレーネに目をとめる。これが女優のバルバラだ。彼女の姓は知らない。バルバラはすらりとしていて上品で美しい。映像のひとつひとつが字幕なしでも理解できる。彼女は半ば強いられて彼のモデルになり、そのことから波乱が生じる。これをバルバラは素晴らしく巧みに、繊細に演じている。なにがしかを知らされた女子修道院長が杖をついて登場して、画家は去らなければならなくなる。これを機に彼女から少しずつ信仰心がうすれてゆく。無力で頼るものもなく、愛に燃え立った彼女は男の車に乗せられるがままになる。この後、彼女は大都會で最高に美しい社交婦人として登場する。しかし彼女の自尊心は失われてしまっている。新しい恋がめげえ、シャンペンの酔いにまかせて彼女は新しい恋人を抱きしめる。夫は匿名の手紙を受け取る。このようなことはこれまで何千回となく描かれてきたことだが、また何千回となく繰り返し人を惹きつける。嫉妬が哀れな画家をむしばんでゆく。この地獄の苦しみは人を孤独にし、血に飢えた獣に変えてゆく。こうして彼はその匿名の手紙をぐしゃぐしゃに丸め、平静を装うが、自分をごまかすことができないままに、不幸が確実なものになるまで待っている。いや、待っているのは不幸ではない。すでに彼は不幸に見舞われていた。待っているのは治療策であり、犠牲だ。彼はこの犠牲もろとも散り果てようとしているのだ。イレーネと恋人の二人は別れを前に神経を昂ぶらせている。抱擁、口づけ——そこへ不幸な画家がやってくる。異国から

きた若い恋人が倒れる。決闘に敗れるのだ。これでまたすべてがうまくゆくと夢見た画家は、哀願しながら再び彼女に近づこうとする。彼女の驚愕、嫌悪。彼女がそこに見るのは欲望を満足させた獣にほかならない。そして自分は獣である男が獲得した獲物で、こんどは自分を餌食にしようとしているのだ。彼女が感じるものは憎悪以外の何物でもない。そして死んだ男を悼む涙。そして、再び修道院が現れる。

ある教会の壁龕のなかに異様な精彩をはなっている大理石の彫像がある。教会の暗がりの中で、壁龕の彫像は側面からの白い日差しを受けて、この世のものとは思われない灰白色をおび、ほのかに目を開いている。その前で農婦たちがひざまずいて、像に見入っているのはなぜだろうか。それが柱像であることを彼女たちは知っている。けれども彼女たちは形象において感じ、そして思考するのだ。世界、そして自然もまた形象、形態、形姿において思考する。柱像は分別くさい人間が思うような象徴ではない。それは——本当にマリアなのだ。すべての教会において柱像は真に神でありマリアなのだ。奇跡をおこす美しいヴィルノの聖母の前で私は群れなす人々とともにそのことを感じた。これらの素朴な人々の感情ほどに自然なものはない。私は彼らの敬虔さを共有したい。

壁がくずれかけた古めかしい建物が立ち並ぶアルヒデイヤコインスカ通りを抜けると、通りがひらけて、上空を飛行機が唸りながら飛んでゆく。私は丘の上にいるのだ。下には低地の街がある。丘は緑なす斜面となって下り、遠くで煙突が煙をあげている。左手の低い建物が並んで入り組んだ路地の向こう上には、壮麗で堅固な堂々たる建築物がそびえている。鋸壁に囲まれて、窓は一部ふさがれている。その内側中央からは忌まわしい鉄製の増設物をいただいた頑丈な円塔が突っ立っている。その建築物に沿うように汚らしい路地が走っていて、屋根裏部屋のひとつをのぞくことができる。^(五)この巨大な建築物は昔は城塞だったが、現在は監獄だ。私は少年たちのようにはこの斜

面を駆け下りることができない。

グロツカという通りが下の方へ通じている。子供たちがあちこちで遊んでいる。あたりが賑やかになり非常に活気づいてくる。^(六)ユダヤ人街だ。建物は黄色や淡紅色に塗られている。門が通りの上でアーチになっている。派手な赤色だ。上には人が住んでいる。そこを男たちや女たち、子供たちが行き来している。これが素晴らしいと推賞された門だ。やれやれ、私は君たち美の使徒たちをよく知っている。情けない君たちを。アーチの上の住居、窓の外を見ている人たち、そして隣接する家々の人たちにも私は目をやる。悲惨の極みだ。それなのに門の建築様式上の美しさを語ろうとするなんて。私は一度ローマとギリシャへ行つてみたい。恥ずべき芸術愛好家たちがそれほどに愛するものを見て、その正体をあばいてやるのだ。これら繊細な野蛮人たちの目を開いてやらなければならぬ。この芸術作品に塗られたしつこいどぎつく汚らしい赤色を見て、私は苦い喜びを覚える。そうだ、生活とはそのようなものだ。通りには暗い雑貨店が並び、狭くうねりながら下つてゆく。水運びの老人が一人、かがめた肩に棹を担いでゆつくりと通り過ぎていく。その両端にはバケツがぶら下がっている。彼らは水道を持っていないのにちがいない。ほろを着た男たちが足を忍ばせるようにして歩いてゆく。肩と脚の白い肌が露出している。いくつかの曲がりくねった路地が井戸のある下の広場に通じている。今にも壊れそうな木造の家や、しつこいを塗った小さな石の家が広場を囲んでいる。汚いカフタンを着たユダヤ人たちが往き来している。大声をあげる女たち。刃物研ぎ師が仕事をしている。路地の一つに入る。小さな家は二階建てか平屋で、赤く塗られた家もある。これらすべての頭上を、高くそびえた二つの巨大な石の斧が城の方から脅かしている。城の裏側までやってくると、路地は行き止まりだ。別の路地へ入る。またしても小屋のような家が並んでいる。この路地はクラヴィエツカとかいう名前だ。子供たちがいっぱいいる。道は泥で汚れている。ほろを着た女たちが赤ん坊を重そうに抱えて行く。上空では

またしても飛行機が轟音を立てている。

弧を描くように回りながら、私は城であり監獄でもある城塞に近づいて行く。それは穀物の茶色い切り株を残した丘の上に立っている。ここでは小さな少年たちが木の枝の端くれでサッカーをしている。彼らは色のまだらな薄いキャラコのズボンをはいている。と、その時、甲高い女の叫び声上がる。人々の一団が近づいて来て、道があげられる。子供たちが数人先に駆けてゆき、カフタンを着てキツパをかぶった真剣な表情のユダヤ老人が、大声でわめく女たちの前方を力強い足取りで歩いて行く。老人は女たちを振り返ろうとはしない。彼女たちを助けようとする者は誰もいない。なぜ警察を呼ばないのだろう。監獄がすぐ近くにあるのに。なぜあの女性たちを助けないで叫ぶがままにさせているのだろう。あの老人が彼女たちに何かをしたというのに。そして今や人々の群れ全体が私のそばを通過して行く。子供たちが蠅のように取り巻き、女性たちは助けもなく、恐ろしい叫び声をあげている。男は知らん顔をして行く。その時、見ると、男は肩から背中へ綱か帯をかけている。そして背中には——私は男を背後から見ているのだが——黒い、長い、そして軽い箱を背負っている。あつ、棺だ。そうだ。葬式なのだ。あれは遺体、子供の遺体で、貧苦に追われる人々の葬式なのだ。棺を男が背中に帯をかけて運んでゆく。それで母親、親族、泣き女たちが後ろから金切り声を上げ、ののしり、髪をかきむしっているのだ。そのすぐ後ろを一人の農婦が泥で汚れた車馬道を渡り、開いている門の中へ入ってゆく。農婦はそこに立って、足を大きくひらいて、スカートの前に引っ張っている。すると湯気を立てた噴流が足の間の敷石に勢いよくぶつかり、足がすばやくさらに開かれる。放尿はたくましい駄馬のそれのように女のスカートから多量にほとばしり落ちていく。

道は再びなだらかな上り坂になる。暗い店先ではどこでも商売が行われている。歩道の上で大勢の男がタバコを吸っている。側溝はしつこい固められている。消毒薬の臭いがする。

市が立つ広場にやってきた。日差しは明るい。鶏とガチョウが木の箱や籠に入れられていて、鳴き叫んでいる。ポロポロの服を着た男たちが何をするでもなくたむろしている。何人かは本当に粗布の袋を身体に結わえ付けている。また何人かはズボンをはいているが、脛も太腿もぜんぶまる出しだ。それよりましな服を着た者たちは古物を手にして商っている。誰もがお互いに顔を見やっている。この通りはドウスカ通りという。継ぎをあてた長靴が売りに出されている。農婦がガチョウを抱えている。ガチョウの首を腕でしっかり挟み、前方で黄色い足をつかんでおり、ガチョウの頭が後ろ脇の下からのぞいている。子供たちがたくさん学校から駆け出てくる。本やノートを紐で束ねてぶらぶらさせている。

私がこれらの子供たちをさらに細かく観察していると、彼らも私を観察していると、彼らには重度の貧血が認められる。青白い大人のユダヤ人たちがゆく。民族衣装をまとい、赤い髭を生やし、顔はこけて頬が落ちくぼんでいる。なかにはびっくりするような謎めいた姿も見られる。少女たちはなんてひどいぼろ服を着ているのだろう。一人、おそらく十歳くらいの少女が白い小さなラム毛皮の服を着て、頭に赤い大きなリボンをのせている。けれど彼女が側溝の縁に立っていると、風が起きて、毛皮の服が吹き上げられる。すると彼女は肌着とシヨートパンツしか身に着けていない。市場からのびている大きなユダヤ人通りはルバルトフカ通りという。ポーランド人たちの通りはほほどの人出だったが、ここはごった返している。木の橋が川にかかっている。ルバルトフカ通りには裕福な商人が住んでいて、中小の商店がたくさん並んでいる。人々は互いに無関心に雑踏のなかを行き交っている。ただ鋭い目付きで人々の様子を観察している者が少数いる。彼らは多くの人々と同じように建物の前や店の中をぶらぶらしている。そして通行人を嗅ぎまわり、取り囲むのだ。男たちが自分の店の前に立っている。彼らや他の多くの男は非常に粗暴で頑健であるように思われる。これらは極めて冷酷な打算と非情の意志を持った男たちだ。しかし、髪

は輝くような赤毛だが、貧血で青白い顔色の人々も見受けられる。この人たちの髪の下からは、眉のない、悲しげに哀願するような絶望的な眼がのぞいている。

建物の壁が大きく開けて、凹部や隙間ができており、そこに木の屋台や売り子たちが入っている。たくさん馬車が、がらがら音を立ててルバルトフ村へ上ってゆく。ユダヤ人が手綱を取っている。彼らは荷箱やわらの上で体をかがめるようにして座っている。

そしてこの通りの終わりに立っている十字架像のそばを通り過ぎてゆく。戦死したドイツ人がその下に眠っていると云う。

昼下がり。みぞれが降り始める。道路の左手に大きな自動車工場がそびえている。小売商が寄り集まったそのまっただなかに工業施設があるのだ。ドイツ人が所有していたが、焼失して、再建されたものだ。この広大な建物の前に、みぞれの降るなか、貧しい女性たちが集まっている。手に持ったバケツからは湯気が立っている。パイプから流れ出る工場の熱い排水を取ってゆくのだ。とある緑の前庭の向こうにユダヤ人病院がある。中へ入り、廊下を通って病室をのぞく。通路に嵌めこまれた赤いほうろくのプレートが「アメリカの援助」への感謝を示している。誰かが亡くなったのだ。歌うような女性の悲嘆の叫びが廊下をこえて響いてくる。みぞれが強くなる。売り子たちは顔を曇らせて暗い店の中で、そして店先で客を待っている。通りがほぼ尽きるところに大きなユダヤ人大学が建てられている。正統派の大学で世俗のイエシバー（学塾）だ。市の向こう側にはカトリック大学があり、ここにはユダヤ人大学が建つ。生徒と教員を千人収容できるということだ。

これが地方だ。大都市が政治を動かす、地方ではその後を宗教がおもむろについて行く。

途方に暮れて、案内してくれる人を探す。ルバルトフカ通りでイディッシュ語とポーランド語で書かれた看板を

眼にする。絵画展の案内だと判る。若者が数人そこでぶらぶらしているのでドイツ語で話しかけてみると、通じる。彼らに中を案内してもらおう。その後で彼らは私にルブリンを案内してくれる若者を紹介してくれた。絵画は移動展のものだ。多くの絵が老夫や祈る人々、礼拝室といった民族的な題材で、彫刻もある。しかし民族的なのは題材だけで、技法は西欧の描き方を取り入れている。私の案内者はブントに所属する社会主義者だが、付け加えるならば、恐ろしく無知だ。ほとんど世の中のことを知らないのだ。彼を啓蒙するものは日刊新聞しかない。新築中のイエシバー（学塾）の前で彼は微笑みながら立ち止まる。「正統派が建てているんだ。それが完成したら、俺たちが入り込んで近代的な学校にするか、集会を開くんだ。」私は黙っている。そんなことは信じられないのだ。街の中心に向かって歩く。農婦が小さな荷馬車で市場のそばの通りの急な坂道を上っているが、路面が濡れていて滑り落ちそうになっている。むちを打つと、うまく上り始める。

世間知らずの若い案内人は私を連れ歩きながら、知っていることを教えてくれる。劇場のそばを通る。ファル(七)のオペレッタ「マダム・ポンパドール」を上演している。向かいにあるシトー修道会の教会は閉まっている。案内人の説明では「教会は抜群に高くて、古いシステムにのっとっています。」何を言っているのか分からない。けれども質問すると、新しい謎を持ち出してくる。司教は大聖堂近くの小さな建物に住んでいる。アルヒディアコインスカ通りの近くに美しい近代的な建物があるのが眼にとまる。あれは学校で、戦前はあるフランス人女性のものだった、と彼が言う。そして私たちが通りつつある丘について紹介してくれる。「この丘ではいろいろ大きな会戦や戦闘がありました。悪党たちとです。」丘の上の古い建物が今にも崩れ落ちそうになっていて、半分だけ残っている。そこに崩壊の直前まで人が住んでいたが、残った半分には、何と、今でも人が住んでいるのだ。私が前から上から屋根裏をのぞき込んだあの角の建物は、昔、教会だった。その後無宿者が住んだ。現在は聖職者たちが司祭の

ための住居を造っている。城塞の上の斧は何を意味しているの。「ええっ？ 市の宣伝のためだよ。」

彼は古いユダヤ人墓地に私を案内したいと言う。世界的に有名だと言うのだ。貧民街を通り抜けてゆく。地中に沈みこんでしまいそうな小屋が家族の住居だ。人が住んでいるとは信じられないような家がある。しかし彼は私を嘲笑して、どのように住んでいるのかを実演して見せてくれる。この地域には広々とした原野や湿地が隣接している。橋の右手には草原と煙突が見える。「ここは見晴らしがいいですね。」

古い墓地。私たちの来訪が伝えられると、二人の女性が一緒になって大声で騒ぎだす。彼女たちは、一方の女性の亭主である老墓守がいないとわめきちらし、次にはこの女性が、うすのろ亭主がいないので、外の者が儲けをとってしまうとののしっている。その後カフタンを着てキツパをかぶった、だいぶ若いユダヤ人が案内してくれることになる。大きく盛り上がり起伏した丘を越えると、もう墓場だ。

多くの墓が埋もれ、草におおわれている。石碑より草丈のほうが高い。最後の埋葬は九十六年前に行われた。丘がくぼんでいる所で、その素朴な敬虔な男性は杖を指し示して、ずうつと昔、キリスト教の洗礼を強いられた十二人の敬虔なユダヤ人がここで自らを葬り去りました、と語る。あたり一帯丈の高い草が茂り、灌木の茂みが墓を覆い隠している。孤立した墓石もあるが、多くは集まって立っている。ヴェイルノのように、いくつかの墓石にはくぼみが設けられている。祈願の紙片を受け取るためだ。

案内人はしばしば手で鼻をかみながら、真顔で語る。「ここには全世界を震撼させた人たちが眠っています。」そこには動物の絵やシンボルなど、豊かに装飾を施された立派な墓石がそびえ立っている。彼は脇に離れて立っている墓を指す。「そこに眠っているのは祭司です。毎日、日が昇ると一羽の小鳥がやってきて、そこで歌を歌います。追っ払ってもまた来るんです。」

賢人たちの一団が眠っている。その中には一人の富豪も入っている。「その人は彼らが学べるようにお金を出したんです。」偉大なルブリンの「師団長ルリヤ」は二五〇年前からここに眠っている。邪悪な支配者が彼の墓石を損壊し穢した。その古い破片は草の中に転がっている。彼の墓石は新たに建てられた。そこには「彼はイスラエルの光明であった。多くのタルムード解釈を著し、聖人であった」と熱烈に称えられている。彩色した鹿の裝飾が施されている。多くの石碑が運び出され、道路のぬかるみを覆った。ある非常に立派な板碑には、本の入った開かれた書棚がたいへん造形的に彫刻されている。ここには知的な女性が眠っているのだ。アブロム・カシエという人は非常に神聖なレツベだった。彼が亡くなり、墓地へ運ばれていた時、道端で彼に向かって冒瀆的なことを叫んだ者がいた。すると死者は身を起こして、手を洗うのにお湯を持ってきてほしいと頼んだ。それを受け取ると、彼は大声が聞こえてきた家に向かって湯をはねかけた。すると家は粉々になった。

高いところにぼつんと立っている墓に近づく。すると案内者が引きとめ、杖を地面に置いて、「定めにより、四エレよりも近づいてはいけません」と言う。これはレツベのヤコブ・ポラツクの墓で、ここに四五〇年間眠っている。たくさんの墓の群れの中でポーランドのユダヤ人一日王は安らかに憩っている。墓碑には王冠と矢を放つ裸の男性像が彫られている。新しい瓦礫の山の前に立つ。「ここはレツベが彼の十人の教え子と一緒に集まっています。」二つの墓碑が寄り添っている。とても立派だ。母とその娘で、娘の墓石には鷹が彫られ、母親のには小鳥が二羽とまっている。

ある墓の前で墓守が格別厳かに敬意を表している。これは四〇〇マイル先までなら何でも見ることができた聖人の墓です。しかし結局、彼はたくさんの穢れを見たので、一〇マイルだけ見えるようにしてほしいと神に願いました。そしてそうになりました。ホルヴェイツツというのが彼の名前で、亡くなって百年以上になります。それから、そ

ここに眠るのが「鉄頭」と呼ばれた男です。なぜですって。彼は木を見れば、葉っぱが何枚ついているか正確に言い当てることができたのです。両面に文字が刻まれている墓碑がある。前面は彩色され、背面はヘブライ語の鏡文字のように見える。この石碑は元々彩色された前面の碑文しかありませんでした。しかし、ある時、一夜にして石の中から背面の文字が自然に浮かび出てきたのです。一夜のうちに自然に浮かび出たのです。

当市では私のために時間をさいてくれる人がいない。数分だけということである人が対応してくれる。ヴォリニアの裕福な精糖工場経営者であるヤロシンスキが大学設立のための基金を出した。司教団が大学を管理して、教授を任命し、学長を選出している。大学には三つの学部がある。けれども資金がない。公立の大学にしようとしてくれているが、国が補助金を出さなければならなくなるので、他の大学が反対している。大学はカトリックで、規約は当然カトリックの洗礼を求めている。

ポーランド人とユダヤ人の共生に関しては、ロシア時代には両民族間に良い関係があった。その後、ロシア人はポーランド人対策にユダヤ人を利用した。ポーランドにおけるユダヤ人排斥運動はこの時から始まる。当市では両民族間の社会的交流は皆無に等しい。優勢なのは正統派のユダヤ人だ。市の選挙で彼らは絶対多数を獲得した。市参事会はしかし事実上空分解してしまった。会員の半数以上がイディッシュ語しか話せなかったため、政府と衝突してしまったのだ。政府は、少なくとも議長はポーランド語を話すように要求した。しかし、議長がそうしようとしたところ騒動が起きて、それが最後の会議となった。

駅の方角へ足を向ける。駅への道はずいぶん遠く、道沿いにみすばらしい商店がたくさん並んでいる。その多く

は煤けた小さな建物だ。工場もひとつ見える。濁って幅が狭い小さな川に近代的な橋がかかっている。これがルブリンのはずれを流れるブイスチユシツア川だろう。川の片側で電車が建設されている。市街電車を短路で市中へ通すためだ。大柄なポーランドの農民や労働者たち。それに比べるとユダヤ人たちはおそろしくみすばらしい。毛皮帽や作業帽をかぶったポーランド人たちは肩幅が広く、穏やかで、鈍重で、しばしば張りのない陰鬱な表情をしている。要領がよく注意深い表情や、おどけた抜け目のない表情をした者もなかにはいるが、物事を真剣に観察する面がまさっている。この地区のユダヤ人について言えば、活気、機転、活動性の点ですぐれている。彼らはよく大声を出す。口論している集団に出くわすこともしばしばだ。特別なタイプに出会うこともままある。ワルシャワのポーランド人住民の場合は浅黒い肌が多かったのだが、——私は彼らがユダヤ人に同化したと思っている——ここでは多くのユダヤ人がたいへん白い肌をしていて、短い獅子鼻は鼻孔が開き、額は平らで広く、近視だ。特有の服装がなければ、ポーランド人の農夫と見まちがえてしまうほどだ。帽子や肩にモルタルを付けた十八歳の若者と話す。彼は私に商売の話をもちかけようとする。彼は旧制の学校を出ているが、その無知さ加減は驚くべきものだ。ベルギーはウィーンの近くにあるのかと聞いたりする。とはいえ、抜け目はない。彼は、全世界について私がいかに考えるか、聞きたいという。彼自身は次のように思っている。「神様が世界を創った。これは確かだ。家は人間が造った。これは知っている。人間には父親がいて、その父親にも父親がいる。でもその一番もとは？ それから地球全体は？ 俺は、亡くなった俺の親父とじいさんが信じていたことを信じるよ。」

彼はまったくの田舎育ちで、好奇心が強く、何でもすぐさま知りたがるのだが、それでいて保守的で、疑い深い。知性というものは民族学上の問題もはらんでいる。それぞれの民族には様々な知性がある。けれども知性のいからかは生活様式とも関係している。ユダヤ人は一般に知性的だと言われている。実際、東欧ユダヤ人は鋭敏だ。

彼らの前で感情に流されてはいけない。彼らは論争的で過度に論理的であることに喜びを感じるのだ。形式的なものが彼らの性に合っている。しかし未知のことに対しては本能的に拒絶的な態度をとる。これは彼らが隔離されてきたことに起因する。彼らは拒絶し、受け入れることができない。盲目で、多くの事柄や関係についての理解が欠けている。これは多少田舎者じみていて無骨で見苦しい。——「解放」後もなおこういったことが彼らの習性となっているのだ。

あの世間知らずの案内人が再び街を案内したいという。私は小さな市立博物館に連れられてゆく。ある広間でマリアン・モクファアの美しい水彩画が展示されている。その中に「海の嵐」という題の絵がある。私のパルジファル(二)はうなずいて、「見てご覧なさい」。館内の別のセクションには、鳥や魚やカタツムリの剥製など、博物標本のかかりのコレクションがある。パルジファルが不意に大声をあげる。「ねえ、ねえ、ご覧よ、ほら、ほら、犬の骨があるよ。」骨格だ。彼は人間の骨格の前で考え込んでいる。「これは生きてた人間だったのかな。」——「そうだよ。」——「何てことだ。」亜麻の前に立って、「これは大いに見る価値がある。」

とある集會に迷い込む。ポーランド人の講演者はずんぐりした元気がよい男性で、雄鶏のとさかのように、上着のポケットから色あざやかなハンカチをのぞかせている。胸をはって立ち、胸部が非常に共鳴している。話しながら頭をやや後に反らせ、目は開いているが、何も見てはいない。そして舌先や喉全体の筋肉を使って口から言葉を投げ出すのだ。言葉が破裂する。彼はしばしの間、広げた手を演台の天板に突っ張り、開いてはいるが何も見えない眼もろともに頭を垂れて、自分の言葉に聞き入るかのようじつと立ち、舌と耳でその余韻を味わっている。それから再び誇らかに頭を後へ持ち上げる。彼の話は、人に聞くところでは、慎重だが肩がこらない話だという。夜、ホテルのレストランで、隣のテーブルに劇場の人たちが座っている。比較的若い女性が二人、一人は青白い

顔をして物静かで、もう一人は赤い顔をして陽気だ。肥えて大柄の若い男性が陽気な女性にご執心で、彼らはお似合いだ。それからブロンドの髪をオールバックにした紳士と、テーブルの花瓶の花の後にもう一人の男性、この人は気配でしか分からない。ブロンドのオールバック氏は一人で出てゆく。残ったのはペアの二人と、花の後にいる姿の見えない男性と哀愁をおびた退屈な女性だが、この女性もまもなく別れを告げる。やがて太鼓腹になるだろう愛想のよい男とその陽気なパートナーは一緒に笑い、飲んでいゝ。最後にこの若いフォルスタツフは陽気にボーイをからかって、舞台に立つと艶やかに見えそうな赤い頬の女性と立ち上がる。彼女は心地よく、眠そうに、彼と出ていく。花瓶の背後の姿の見えない男性は後に残っている。

これ以上この市で待っていても無意味だ。私は私の東欧のバルジファルに別れを告げる。彼はそれでもなお、新聞社にドイツ語かフランス語ができるかもしれないポーランド人がいると言う。荷造りが終わった時、この人の書付を受け取る。「拝啓 その方の質問を私どもにお伝えください。そうすれば明日お返事を申し上げます。」これで万事休す。

再び天空。廣大無辺の天空。今宵は妨げるものもなく、冷たい夜の饗宴をくりひろげる星々を伴い、間近かにまで迫ってくる。星の大群はすぐそこだ。それらは途方もなく大きくなって押し寄せてくる。私はそれを顔で、全身で、生き生きと感じた。

訳 注

(一) ポーランドとリトアニアの統合 一三八六年、ヤギエウオ家の下に、ポーランド王国とリトアニア大公国の最初の王朝連合が始まったが、その後の情勢の変化を受けて、一五六九年七月、ルブリンで開かれたセイムで新たに両国の統合が決定された。「ルブリンの合同」。

- (二) カトリック大学 一九一八年開学。旧社会主義国では唯一のカトリック大学で、一時、教皇故ヨハネ・パウロⅡ世が教鞭を執ったことで有名。
- (三) ジグムント・アウグスト王 ヤギエウォ朝最後のポーランド王。ルブリンの合同を実現した。(在位一五二九―七二年)
- (四) 私は赦しを請い願ひ ルカによる福音書の中の「父よわれ罪をおかせり」にもとづいた表現。
- (五) この巨大な建築物 ルブリン城のこと。
- (六) ユダヤ人街 十六世紀には丘の上の城の周囲に大きなユダヤ人街が形成された。その後、一九四一年にナチス・ドイツによってゲットーに移されるまでの間、ユダヤ人はルブリン市の発展に不可欠な存在として活発に活動した。
- (七) ファル レオ・ファル(一八七三―一九二五年)。オーストリアの作曲家。レハール、カールマンと並ぶウィーン・オペレッタの第二黄金期の巨匠。
- (八) 師団長ルリヤ ルリヤ サロモ・ベン・イエヒエル(一五一〇―七三年)。
- (九) エレ 昔の尺度、一エレは五五―八五センチ。
- (一〇) ヤーコブ・ポラック 一四六〇―一五四一年。ピルプルという新しい議論の方法を広めた。
- (一一) パルジファル ヴァーグナーの同名の楽劇の主人公の名前。パルジファルとはアラビア語で「純潔なる愚者」を意味すると言う。
- (一二) フォルスタッフ シェークスピアの『ウィンザーの陽気な女房たち』と『ヘンリー四世』に登場する太って陽気なほら吹き
の騎士の名。

訳者あとがき

本編はアルフレート・デーブリンの『ポーランド旅行』から第四章にあたる「ルブリン」を翻訳したものである。

ルブリンは東ポーランドの工業と文化の中心地であり。現在人口三十五万人を超える都市である。歴史的には、すでに六世紀ごろからルブリンへの定住が始まっていたとされるが、一三二七年に市として正式に認められ、その

後、商業の発達と共に、市は一五世紀から一六世紀にかけて急速に発展していった。一五六九年には当市で開かれたセイムで、ルブリンの合同として知られる、ポーランドとリトアニアの統合が決定されている。ちょうどこの頃、ユダヤ人のコミユニティーも形成され、大戦期には人口の四〇パーセントを占めるまでになっていたという。第二次大戦中にはゲットーが築かれるなどして、それらユダヤ人の大部分が殺された。また、近郊にはヨーロッパ最大の強制収容所の一つマイダネク強制収容所が作られた。

そのような古都ルブリンを歩くデーブリンの視線は、モットーにあるように、一般的な旅行者のものとは異なり、人々の貧しい生活、信仰、特にユダヤ人たちのそれに向けられてゆく。